様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：１６２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０４３０３

研究課題名（和文）幼児期のリテラシー獲得を支える保育評価スケールの開発と検証

研究課題名（英文）Development and Validation of the Scale for Assessment of Early Childhood Literacy Education

研究代表者
松本　博雄（Matsumoto, Hiroo）

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：２０３５２８８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：保育実践が幼児期から学童期のリテラシー(Literacy)発達に与える影響を検討するために、初期リテラシーに関わる保育実践の質評価スケールを開発することを目的とした。保育士・幼稚園教諭・小学校教諭のべ394名に対する調査結果から、リテラシー発達を支える指導観として、直接型・受動型・対話型の3因子が見いだされた。これらの指導観と、保育者側の属性との関係を分析した結果、指導観の形成に影響を与える要因として、経験年数やクラス担任か否か等の個人的な属性に加え、園ごとで保持されている共有された指導観の影響が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The range and extent of early communicative experiences that teachers encourage are key factors affecting children’s literacy attainment. This study aimed to explore the beliefs held by Japanese early childhood education and care (ECEC) teachers in relation to early literacy instruction in terms of their pedagogical processes. To this end, 349 ECEC and 45 primary school teachers were asked to complete a two-part questionnaire dealing with (1) ECEC teachers’ literacy beliefs and (2) teachers’ general pedagogical beliefs. Exploratory factor analysis extracted three sub-categories of literacy belief; Direct instruction, Natural development, and Social interaction. These results hold implications regarding how teachers’ respective beliefs influence their various methods of facilitating the early literacy development of young children in ECEC settings beyond differences in educational tradition concerning early literacy.

研究分野：教育心理学・発達心理学

キーワード：文字　幼児　保育　就学前教育　リテラシー　信念　指導観　保育者

１．研究開始当初の背景

発達研究の成果に基づく生涯発達における乳幼児期の重要性の理解や、少子高齢化や労働形態の変化、財政難といった社会構造の変化を受けての政策立案の必要性等に伴い、保育(Early Childhood Education and Care)の質への関心が国内外で高まりつつある。なかでも国際的な動向をふまえたとき、リテラシー(literacy)は保育の質およびそれを支えるカリキュラムの方向性を考えるうえで、欠かすことのできない指標だといえよう(OECD, 2012; 2017)。

我が国では従来、リテラシーに対し「読み書き能力」という訳語をあてることが多く、そこからは読み書きをはじめとする、文字を扱う一連の活動に従事する子どもの姿が連想されやすい。しかしながら、ここ 20—30 年ほどの諸研究の動向は、リテラシーを個人的な文字や読み書き知識の獲得の有無という水準から、文字もその一つに含めた、言葉を用いた包括的な表現力・対話能力の獲得というかたちに変化させてきた(cf. David, Raban, Ure, Goouch, Jago, Barriere, and Lambirth, 2000 他)。この視点から考えると、具体的な文字の読み書きに先立って生じるリテラシー(emergent literacy)に関わる活動を理解することが、リテラシー獲得を考えるうえで欠かせない要素となる。学童期初期にとどまらない、乳幼児期から学童期初期にかけての初期リテラシー（early literacy）の発達や、それを支える実践のありように関する諸研究(Westerveld, Gillon, van Bysterveldt, and Boyd, 2015; Levy, 2016 等)が数多くみられることは、この傾向を物語るものだといえる。

この点から考えると、Early literacy を豊かにする取り組みは、就学前教育施設はもちろん、家庭も含めて考えることができるが、特に Early literacy を促す保育の質という点を考えると、物理的環境と並んで保育者の子どもへの関わり方や、実践に取り組む姿勢をあげることができる。それを規定する要因としては、カリキュラムと並んで保育者個々のもつ知識や信念(belief)を考えることができよう。このことは、Early literacy の獲得に関わる保育者の信念を対象とした先行研究(Sverdlov, Aram, and Levin, 2014; Hur, Buettner, and Jeon, 2015 等)が繰り返し行われていることからうかがい知ることができる。つまり、Early literacy の獲得に関わる保育者の態度や教示、環境構成の質を考えるうえでは、カリキュラムによる概要把握を越えて、保育者の信念の内容と構造を明らかにすることが欠かせない。

しかしながら、日本においては、これまで述べてきたような広義の視点からリテラシーの発達およびそれを支える実践を捉える適切な指標はまだ開発されていない。この領域の多くの先行研究が、多様な母語を抱える子どもたちに対して就学前および初等教育が実践されている英語圏のものであることを考えると、それとは教育的伝統や言語体系が大きく異なる日本において研究を進めるためには、先行研究で開発されている初期リテラシー獲得および実践の評価スケールをそのまま適用するのでは不十分であり、まずは適切なスケールを開発する必要があるといえる。

２．研究の目的

以上をふまえ、本研究では、特に幼児期の保育実践が、幼児期から学童期にかけて発達する初期リテラシーに与える影響を明らかにするというねらいのもとで、初期リテラシー指導に関わる保育実践の質評価スケールを開発することを目的とした。具体的には、日本の保育・教育実践の特徴および日本語の特徴をふまえた初期リテラシーに関する保育者の実践観を捉える尺度を開発したうえで、その特徴およびそれを成り立たせる背景要因について検討した。

３．研究の方法

(1)実証データに基づく研究

香川県内の幼稚園・保育所・こども園に勤める保育者 349 名（うちクラス担任 64.4%／経験年数 10 年以内 44.7%、11-20 年 34.41%、20 年以上 20.88%）、小学校教諭 45 名を対象に、以下①②の内容からなる質問紙調査を実施した。

①保育・教育における文字指導観

幼稚園・小学校教諭免許／保育士資格を取得予定の大学 3-4 年生／大学院生 19 名を対象とする「幼児にとっての文字」「幼児期の文字指導」についての自由記述調査、ならびに国内外の先行研究（Burgess, Lundgren, Lloyd, and Pianta, 2001; 内田・浜野・後藤, 2009 等）をもとに、保育者ならびに指導主事としての勤務経験をもつ大学教員 1 名の意見をふまえて項目を調整し、計 23 個の尺度項目を作成した。

②保育・教育における一般的指導観

保護者対象の質問紙尺度であるしつけスタイル尺度（内田ら, 2009）の内容を保育者・教員向けに置き換えたものをもとに、上述の保育者・指導主事経験をもつ大学教員 1 名の意見をふまえて項目を調整し、計 19 個の尺度項目を作成した。

①②ともに「あてはまらない」「あまりあてはまらない」……「あてはまる」の 5 件法で回答を求めた。合わせて施設種別・保育職経験年数・職位等背景情報に関する情報を収

集した上で、後の分析・考察に用いた。

⑵保育・教育実践記録の分析に基づく研究
リテラシー獲得期である幼児期後半から学童期前半に焦点をあて、保育実践記録を収集し、「遊びと学び」という視点から諸実践の価値づけと整理を試みた。それに基づき、保育・教育実践の中でリテラシー獲得に結びつく対話の土台をどのように保障しうるか、その背景となる条件と留意事項を、保育における記録のありかた、職員研修とそれを取り巻く制度のありかた等を結びつけ考察した。

４．研究成果

⑴実証データに基づく研究
リテラシー発達を支える指導観として、直接型・受動型・対話型の３因子が見いだされた。これらの指導観と、保育者側の属性との関係を分析した結果、1)担任保育者は受動型の傾向が比較的強く、管理職は直接もしくは対話型の傾向が見られること、2)保育経験年数が少ない保育者は受動型が、経験年数が多い保育者は対話型が多く、直接型は経験年数によらないこと、等が明らかになった。さらに所属が特定できる253名(17施設)の級内相関を参照した結果、指導観の形成に影響を与える要因として、経験年数やクラス担任か否か等の個人的な属性だけではなく、園ごとで保持されている共有された指導観の影響が示唆された。
子どもの心情・意欲・態度の総合的な形成を主とした記述である保育所保育指針・幼稚園教育要領では、リテラシーに関わる内容はその一部を占めるにすぎない。いっぽうで、各施設ではリテラシーに関する多様な指導方針が存在する。経験の浅い担任保育者に、リテラシー指導の方針をそれほど明確に有していない受動型の傾向が強かったこと、管理職の指導観の様相や級内相関から、施設毎の指導方針の多様性とその影響が示唆されたこと等の結果は、日本の就学前教育実践におけるリテラシー指導の特徴を捉えるうえで、本研究で開発されたスケールが一定程度有効であることを示唆するものだといえよう。
これらの結果について、イギリスおよび台湾の研究者を中心に意見交換を行い、今後の国際共同研究に向けた準備を進めることができた（論文：審査中／学会発表等：②⑤⑥⑦⑧）

⑵保育・教育実践記録の分析に基づく研究
日本における初期リテラシーの獲得評価は、先述した狭義のリテラシーに焦点化されたうえで「子どもはどの程度文字の読み書きができるのか」という個別式のテストによって明示される結果に基づき評価されることが多い。このような形式は、初等教育以降の教科教育実践において一般的である学びのスタイルと強く結びつきやすい傾向があるといえよう。いっぽうで幼稚園教育要領・保育所保育指針に基づけば、保育実践を通じて成り立つ学びは、「遊びを通じての総合的指導」を介して成立するものであると理解できる。それは、あらかじめ明示された水準の知識の獲得にとどまらず、子どもが周囲の世界について気づき、考え、新たに発見することの経験を基礎に、学習意欲や好奇心、自らの学習に対する自信を発達させていくというプロセスに関わるものであろう。これらの観点は、先述の広義のリテラシーにおける、言葉を用いた包括的な表現力・対話能力の獲得、さらにはそれを発揮する場を社会的にいかに構成していけるかという視点と重なる。以上に基づき、保育実践の場における遊びの中で子どもの表現や対話を記録しより発展させるための工夫、保育制度の変化に伴う職員研修の内容と方向性、地域資源と連動しての子どもの表現力・対話能力を豊かにする場づくりの可能性について検討し、その成果を確認することができた。（論文：①②③④⑤⑥／学会発表等：①③④⑨⑩⑪⑫⑬）

＜引用文献＞

Burgess, K., Lundgren, K., Lloyd, J., and Pianta, R. (2001). Preschool teachers' self-reported beliefs and practices about literacy instruction. *CIERA Report*, #2-012. Ann Arbor, MI: University of Michigan, Center for the Improvement of Early Reading Achievement. Accessed June 26 2016. http://files.eric.ed.gov/fulltext/ED452513.pdf

David, T., Raban, B., Ure, C., Goouch, K., Jago, M., Barriere, I., and Lambirth., A. (2000). Making sense of early literacy: a practitioner's perspective. Stoke on Trent, UK: Trentham Books

Hur, E., Buettner, C., and Jeon, L. (2015). The association between teachers' child-centered beliefs and children's academic achievement: the indirect effect of children's behavioral self-regulation. *Child Youth Care Forum*, 44, 309–325.

Levy, R. (2016). A historical reflection on literacy, gender and opportunity: implications for the teaching of literacy in early childhood education. *International Journal of Early Years Education*, 24(3), 279-293.

OECD (2012). *Starting Strong III: A Quality Toolbox for Early Childhood Education and Care*. Paris: OECD Publishing.

OECD (2017). *Starting Strong V: Key OECD Indicators on Early Childhood*

Education and Care. Paris: OECD Publishing.
Sverdlov, A., Aram, D., and Levin, I. (2014). Kindergarten teachers' literacy beliefs and self-reported practices: On the heels of a new national literacy curriculum. *Teaching and Teacher Education*, 39, 44-55.
内田伸子・浜野隆・後藤憲子　(2009).　幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響：日韓中越豪国際比較調査―お茶の水女子大学・ベネッセ共同研究 2008 年日本調査報告　お茶の水女子大学グローバルＣＯＥプログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」拠点国際格差班プロジェクト報告書
Westerveld, M., Gillon, G., van Bysterveldt, A., and Boyd, L (2015). The emergent literacy skills of four-year-old children receiving free kindergarten early childhood education in New Zealand. *International Journal of Early Years Education*, 23(4), 339-351.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6　件）

①松本博雄・西宇宏美・谷口美奈・片岡元子・松井剛太　2018　遊びの質を高める保育アセスメントモデルの検討―「子ども向けクラスだより」の取り組みから―　保育学研究, 56(1), 印刷中.（査読有）

②片岡元子・松井剛太・松本博雄・高橋千代　2018　認定こども園移行時における自治体の研修の果たす役割　―園長の語りを通して―　香川大学教育実践総合研究, 36, 21-32.（査読無）

③片岡元子・松井剛太・松本博雄・高橋千代　2017　自治体における幼児教育・保育に係る研修制度の立ち上げプロセスの検討□：大学との連携による実施の概要と評価　香川大学教育実践総合研究, 34, 17-27.（査読無）

④水津幸恵・松本博雄　2015　幼児間のいざこざにおける保育者の介入行動：気持ちを和ませる介入行動に着目して　保育学研究, 53(3), 33-43.（査読有）

⑤松本博雄　2015　みんなでつくる保育の未来：子どもたちと私たちの“あさって”のために　現代と保育（ひとなる書房）, 92, 90-107.（査読無）

⑥松井剛太・松本博雄・片岡元子・常田美穂・水津幸恵・高橋蓉子　2015　遊びの質の向上を目指した交換日記型記録と対話の試み：集団遊びの展開過程に着目して　香川大学教育実践総合研究, 31, 13-24.（査読無）

〔学会発表〕（計　13　件）

①Matsumoto, H., Matsui, G. & Tsuneda, M. (2017). What do ECEC children learn through art appreciation in museums? European Early Childhood Education Research Association (EECERA) 27th Conference. (University of Bologna, Bologna, Italy. August 29 to September 1, 2017.)（審査有）

②Matsumoto, H. & Tsuneda, M. (2017). How do kindergarten and nursery teachers facilitate young children's literacy development through interaction during classroom activities? United Kingdom Literacy Association 53rd International Conference. (University of Strathclyde, Glasgow, UK. June 30 to July 2, 2017.)（審査有）

③松本博雄・西宇宏美・片岡元子・松井剛太・藤元恭子・倉野晴代　2017　「遊びの質の高まり」を支えるアセスメントモデルの検討 III　日本保育学会第 70 回大会.（川崎学園：岡山県倉敷市, 2017.5.20-21.）（審査無）

④片岡元子・松本博雄・松井剛太・高橋千代　2017　自治体における研修の充実に関する研究－認定こども園移行時の諸課題の分析とそれに対応した職員研修の検討　日本保育学会第 70 回大会.（川崎学園：岡山県倉敷市, 2017.5.20-21.）（審査無）

⑤松本博雄・常田美穂　2017　保育者はリテラシー指導といかに向き合おうとしているか―読み書き・文字に関わる保育者の指導観尺度の開発―　日本発達心理学会第 28 回大会.（広島国際会議場, 2017.3.25.-27.）（審査無）

⑥Matsumoto, H. & Tsuneda, M. (2016). Teachers' beliefs about emergent literacy instruction for young children: a comparison among nursery, kindergarten, and elementary school in Japan. 31st International Congress of Psychology (ICP) 2016. (PACIFICO Yokohama, Yokohama, Japan. July 24-29, 2016.)（審査有）

⑦Matsumoto, H. & Tsuneda, M. (2016). Japanese kindergarten and nursery teachers' beliefs regarding emergent literacy instruction for young children. United Kingdom Literacy Association 52nd International Conference. (The Mercure Hotel Holland House Hotel & Spa, Bristol, UK. July 8-10, 2016.)（審査有）

⑧Matsumoto, H. (2016). Current Perspectives on ECEC (Early Childhood Education and Care) in Japan: Play, Literacy, and Assessment. National

Chiayi University One-day Conference "Improving Quality of Early Childhood Education" (National Chiayi University, Chiayi, Taiwan. May 28, 2016.)（招待講演）

⑨松本博雄・片岡元子・西宇宏美・倉野晴代 2016 「遊びの質の高まり」を支えるアセスメントモデルの検討 II 日本保育学会第 69 回大会.（東京学芸大学, 2016.5.7-8.）

⑩片岡元子・松本博雄 2016 自治体における就学前教育に係る研修制度立ち上げプロセスの検討 日本保育学会第 69 回大会.（東京学芸大学, 2016.5.7-8.）（審査無）

⑪松本博雄・常田美穂・松井剛太 2016 幼児がアートと出会うとき—能動的鑑賞態度を支える場づくりに向けて II— 日本発達心理学会第 27 回大会.（北海道大学, 2016.4.29.-5.1.） （審査無）

⑫Matsui, G., Matsumoto, H., Kataoka, M., Tsuneda, M., Suizu, S. & Takahashi, Y. (2015). Quality of group play for using the case study method in Japan. European Early Childhood Education Research Association (EECERA) 2015 Conference. (Universitat Autonoma de Barcelona, Barcelona, Spain. September 7-10, 2015.) （審査有）

⑬松本博雄・松井剛太・片岡元子・西宇宏美・谷口美奈 2015 「遊びの質の高まり」を支えるアセスメントモデルの検討 日本保育学会第 68 回大会, ID:14010.（椙山女学園大学, 2015.5.9-10.）（審査無）

〔その他〕
ホームページ等
https://sites.google.com/site/kagawachild/

６．研究組織

(1)研究代表者
松本 博雄（MATSUMOTO, Hiroo）
香川大学・教育学部・准教授
研究者番号：20352883

(4)研究協力者
常田 美穂(TSUNEDA, Miho)
特定非営利活動法人わははネット・子育て支援コーディネーター

松井 剛太(MATSUI, Gota)
香川大学・教育学部・准教授

片岡 元子(KATAOKA, Motoko)
香川大学・教育学部・准教授